
彼らの日常

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らの日常

【コード】

N3636V

【作者名】

ゆづ

【あらすじ】

平和な日常。彼らは夜になって対峙していた。

(前書き)

トランスレータで活躍するサーナイトのトナ、ルカリオのリコのバトルが書きたかった。それがこの短編を書こうと思った唯一のきっかけである。

まずは確認。俺は両手にそれぞれ一本ずつ木刀を持っている。背中には十本同じものを浮かせて、だけどそれはまだ攻撃に転用しない。するつもりもない。

正面には蒼色をした霧が嵐のように吹き荒れている。見慣れた（と言つとありがたみはねえが）光景だ、霧の正体は波導と呼ばれる全ての生き物が持ち合わせるといふエネルギーのようなもので、これを発生させているのはリコだ。

ルカリオであるあいつがこうまで凄い波導の嵐を吹き荒らすのに納得はできる。

ただ、これが出るのは波導使いと共に修練を積んだルカリオだけだ。

二年半前に波導使いとそれが連れ歩いてるルカリオと出会って、真に波導を使うことの基礎を掴んだあいつが短い期間でここまでやるのだから本当にすげえよな。いつもは抜けてる癖に、しっかり強くなつてんじゃねえかよ。

「それはトナもじゃないですか、だってそんなサーナイトだなんて誰が見たことがあるんです？」

「勝手に波導読んでんじゃねーよ、こつちも心読むぞ？」

「それは駄目だって言ったじゃないですか。ほらほら、かかってきなさいつてものです」

「やだね。お前から来いよ」

でもよ、俺も強くなってるからな。

自分に技のエネルギーを過剰に宿らせて自身を強化するシリエジオ。全身を強化するように使うのは、安定して一分間は持続できるようにしたのが最近の話だ。

それと、久々に引つ張りだした十二本の木刀。これのコントロー

ルも完璧だ。背中に浮かせた十本の木刀それぞれ一本ずつに対して繊細な動きをさせることが出来る。これらにシリエジオをかけることも完璧だ。

ただなあ、力つてもものは持つてるだけじゃ満足できない。これを行使しないとなんだかイライラしちまうんだよな。それはリコも同じらしい。だからこうして真夜中にマサラタウンを出て一番道路のど真ん中で対峙しているってわけだ。

別にお互いを傷つけようってわけじゃねえ。自分の力を発散させるに値する、もしくは耐えられる相手が近くにいた。だから相手してくれよつてのが俺とリコの間でかわされたやり取りってわけだ。

突っ込んでくるリコを撃ち落とすために俺は身構える。腕と手に持つ木刀だけにシリエジオをかけているから、それだけが薄い桜色に染め上がっている。

考えられる良い攻め方のパターンは三つ。テレポートで数メートル先にいるリコに接近して木刀による攻撃を仕掛ける。両手に握る木刀を投げてサイコキネシスで操作する。背中に浮かせた十本の木刀にシリエジオをかけてリコに向けて飛ばす。

三つ目のパターンを選択すると同時に、いつの間にか俺は蒼い波導の塊とも言うべき姿になったリコの進路を遮断するように背中の十本の木刀を飛ばす。

薄い桜色に染まった十本の木刀は計算して放った。リコはこのように設置されたらどこに逃げつつこちらに突っ込むか。七本を誘導に費やし、残りの三本を攻撃に使う。

波導の嵐の動きが止まる。上空から鋭角で飛来する危険物を、金属的な音が響くことからメタルクローで弾いているらしい。三つ目の音が響き渡ると、強風が吹き荒れるような音を立てて波導の嵐が消え去った。

「うっ、しび　ッ!？」

リコの強みは、俺とは違って自身を強化することに時間的制約が

ないことだ。しかし、一度強力な攻撃をもらうと自身を強化するまでの隙が生じ、それが強化の証である波導の嵐の消滅を招く。

だから俺は両脚にシリエジオをかけ、強く地面を左脚で蹴ってリコの胸を右脚で蹴り飛ばす。もちろん、棘に脚が刺さらないように注意しながら。

波導による強化をしていないルカリオの体を強く蹴り飛ばすなんてことは、今の俺なら造作もないことだ。リコの身体は背中から土の地面を大きく抉り、そこにサーナイトがルカリオを蹴り飛ばしたという痕跡が残る。

「まだいくぞコラアツ!!」

追撃のサイコキネシス。巨大な腕をイメージし、不可視の力として顕現させる。狙いは倒れ込むリコ。これを叩き潰す!

しかし手応えはない。あいつ、いつの間にか逃げ

「ぐはっ!?!」

「追撃が遅いんですよ!!」

くそっ、神速で逃げつつ接近か!

俺は状況を把握し、瞬時に全身を桜色に染める。ここで大分削っておかなければおれの勝ちにならねえ。

神速というのは、全身の動きを速めつつ攻撃能力を得るという回路を構築する技だ。厄介だが、持続時間ってものがある。一瞬の隙を見つけた俺は桜色の右手でリコの頭を掴み

「きゃっ!」

「痛いぞ?」

同じ色の左手でリコの頬を殴り飛ばした。

波導の嵐を巻き上げなかったのは手早く決着をつけたからだろう。それが墓穴を掘ってしまったことになるな。

地面に強く叩きつけたリコを俺は両手で殴り飛ばしてケリをつけようとする。叩きつけられたリコは少しバウンドし、そこですくいあげるようにぶん殴ればいい。

その流れはリコの体から黒い波導が吹き荒れたことで止まってし

まった。黒い嵐の中で倒立をしたようなリコの赤い目がやけに光り、俺は激痛と共に吹き飛ばされた。

「ぐおおっ!?!」

リコの体から全方位に黒い波導の膜が膨張し、爆発する。あれは悪の波導という技だ。撃ち方にアレンジはあるものの、こっちの方が切り返しがしやすい。

しかし全身が響くように痛い。ずっとシリエジオを起動して戦っていたし、なによりサイコネシスでシリエジオを起動していたのがまずかった。相性を考えると、俺がアレを食らうのは非常にまずいし、シリエジオの防御効果は相性までをも覆すことはできない。

「……ふう、私の勝ちで良いですよな?」

「納得できねえけどな。大体にして俺が押していたのにつてえ……」
痛みをこらえきれず、顔をしかめながらため息をついたのが自分でも分かる。

「ほらトナ、帰りましょう? あまり遅くなるとファイル達が心配しますから」

「そうだな。でもな、あと三十秒もあれば俺が勝てた」

それは安定して全身にシリエジオを起動できる最長時間の一分を意味している。だけど、リコはきつと

「私はトナの隙をついたんです。だからわざと身体の強化もしなかったりしたんですよ。お陰で本当に痛かったんですからね」

そういう策士めいたことを考えていたんだろうな。ったくよお、いつもは抜けてておっとりない奴なんだけどな、戦闘に関してのセンスなら抜群って感じだよな。あの時の、出来そこないのリアルって呼ばれていたのが嘘みてえだ。

俺はファイルが仲良くしているマサラの友人のトレーナー達を快くは思っていない。多分それはリコも同じなのだろうけど。

リコも俺も、ポケモンの種として得意な行動を取れないことが多かった。リアル種なら近接、キルリア種なら遠距離攻撃が得意だと

というのが定石だが、俺とリコはその逆を得意としていた。

厳密に言えば得意としていたのではなく、そちらの方が好きだった。リコは離れた場所からギリギリを狙って攻撃をしていたし、俺だってわざわざ接敵してからマジカルリーフをぶっ放したりしていた。全く意味のない行動だったが、こちらの方が動きやすかったのは事実だ。

まあ、そんなポケモンが強いはずもなく。フィルの友人のトレーナー達は俺とリコを出来そこないと呼ぶようになった。それで俺は奴らが嫌いになった。自分を貶めたというのもそうだけど、フィルをトレーナーとして出来そこないとも呼ぶときやがった。

自分のポケモンに強さを求めない。自分はポケモンと仲良くやればそれで良い。フィルの考え方だって立派じゃねえか。それをトレーナーとしては間違っているというのはいい。腰抜けの腑抜けだって馬鹿にした笑いに腹が立つただけだ。

そして、かつてフィルと俺とリコをあざ笑った奴らは、時折怯えの視線をこちらに配りやがる。前にそいつらのポケモンと手合わせをして、俺が相手三匹をぶっ飛ばしたきり、奴らの間にそれが伝播したのだろう。

すみません、ごめんなさい　そんな心を読むたび、俺は強い怒りを感じる。だけどそれを表に出すことはしない。フィルの迷惑になるからだ。

フィルはフィルで、奴らと話をしたいこともあるし遊びをしたいこともある。それは構わない。俺が怒ったところで、天地がひっくり返ろうとも、それはフィルの迷惑にしかならない。

「ねえトナ、私達は普通のポケモンより強くなってしまいましたよね」

マサラに戻る途中、リコが不意を突くように呼びかけてきた。

「あ??」

「……これで本当に良かったのかなって、時々考えてしまいます」

「どういうことだよ」

「私もトナも、旅をするファイルを守りたいが故にこんな力を手にしてしまいました。自分で言うのも恥ずかしいですけど」

まあそうだな。顔が熱くなるのを禁じ得ないよな。

「でも、私達の力はいき過ぎた力です。それに、ファイルもあんな姿を手に入れてしまった。……私達は国際警察に良いように管理されてしまっています」

「仕方ねえだろ、あんな事件に関わっちまったんだから」

それはそうですけど、と面白くなさそうにリコは言う。なにが面白くないのか、なにが不安なのか、それはおぼろげながら分かるぞ。

「……あの時、俺達がかわした約束があったよな。覚えてるか？」
「……なんのことでしたっけ。そう言いたげにリコは上目づかいでこちらを見上げてくる。仕方がねえか、種としての背の高さの問題って奴だ。」

「ファイルが旅に出る前日、俺達は絶対にファイルを守り通すぞって約束だよ」

「あっ、あの約束のことですか！」

リコは赤い目を大きく見開き、それから申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「……どうして忘れていたのでしょうか」

「忘れちまうくらい、お前の中で深く息づいてるってことだ。でな、俺とお前は同じことを言っただよ」

「それってもしかして『私達の友達を守り抜く』じゃないですか？」

「ビンゴ。正解だぜ」

それを告げてやるとリコは大きく頷いた。俺は前を向きなおし、横目でリコがこちらを見つつ前を向いているのを確認して口を開く。「そしてこれからもそれは変わらねえ。ファイルは特別捜査官だろ？今まで以上に危険な目に遭うさ。その時に誰があいつを守るんだよ」

「よ」

「……私達、ですな」

「そうだよ。俺とお前と、ハルとバリオン。俺達四匹があいつを守るんだ。そのための力だと思えば苦じゃねえだろ」

言っていて少し恥ずかしい。でも俺は、俺の思う事を正直に話したままでだ。

「……そうですね。そう思えば、少しは気が楽になりました」

「よし、なら早く戻るぞ。明日も仕事が早いからな」

「トナもきちんと仕事をして下さいね？」

いたずらっぽく笑うリコは小走りでマサラへの道に行く。またこのって俺は笑いながらリコの背中を追いかける。

こうして日常は過ぎていく。そして時折通り過ぎる非日常の時は全力でフィルを守ってやればいい。俺の生き方は、それが良い。

(後書き)

はい、これからの彼らを想像出来るようなお話のメ方をしたいという事で、こんな物語が出来ました。

割とコンパクトにまとめられたので、自分の中では結構良い評価が出せています。最初のバトルも、二匹の特殊能力の弱点を上手く描けていると思いますしね。

そうそう、最後に。なんでトナとリコって名前にしたのかというと、植物「トネリコ」からとったからなんですよ。フィルが作中でこれを言えばよかったんだけど、なかなか言えないでとうとう言えずじまい。だからここに記そうと思います。邪道ではあるんですけどね。

トランスレータの続きを書く予定は、現時点では一切ありません。前書きに書いたように、これを書くきっかけはバトルを描きたかったからなんですよ。

ですから、続編フラグくるー!?!と期待されている方がいれば、申し訳なく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3636v/>

彼らの日常

2011年10月31日03時20分発行